

メルマガ 「いいテク・ニュース」 季語に遊ぶ 2018年9月27日 (Vol.149)

「クロード・モネ、その絵画と俳句」

「クロード・モネ、その絵画と俳句」



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Autoportret_Claude_Monet.jpg

『睡蓮』と名のつく作品は300点以上にのぼり、日本人にも親しまれ、印象派を代表するフランスの画家クロード・モネ（1840-1926）。

柔らかい筆触と透き通るような色づかいで、自然界の微妙な光の効果を丹念に追求し、「光の画家」の別称があります。

「季語に遊ぶ」では、前回から西洋美術と俳句の組み合わせを試みています。

第2回の今回は『かささぎ』『印象・日の出』『積みわら』『睡蓮』など時間や季節とともに移りゆく光と色彩を追求した画家クロード・モネ。

そんな彼の作品を制作時期順に掲載し、その作品に合う俳句を選んでみました。

お楽しみ下さい。

作品の下に制作時期 | 作品詳細 | 所在を記載しています。

1. 『サン・タドレスのテラス』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Claude_Monet_-_Jardin_%C3%A0_Sainte-Adresse.jpg
1867年 | 油彩、キャンバス、98.1 × 129.9 cm | メトロポリタン美術館

パリに生まれたモネですが、早くから両親とともにフランス北西部の大西洋に臨むセーヌ川右岸の港湾都市ル・アーヴルに移ってきていました。

サン・タドレスはル・アーヴルより北に位置する港町で、叔母がいて、しばしばたずねていたところ。モネは教室ではけっしてよい生徒ではなく、ノートや教科書に落書きをするか、サボったりしていつも海の見えるところで雲や船の動くのを見て育ってきました。

さわやかな秋晴れ。

テラスに咲き乱れる花壇の花々の上を吹き過ぎる風が見えるよう。

旗がなびき、沖合いの船が煙をあげ、帆にいっぱい風をはらんで走っています。

風景というよりは風光という言葉がぴったりの絵です。

秋晴の空気を写生せよと言ふ

沢木欣一(さわき きんいち) (1919-2001)

<季語>秋晴で三秋

秋の空が澄んで晴れわたること。

秋は晴れた日が続くと思いがちですが、比較的雨量の多い季節でもあります。

初秋には台風が来たり、仲秋には秋雨が続くので秋晴れは何日も続かず、「男(女)心と秋の空」とことわざになっているくらいです。

晴れた空は、さわやかさを人の心にまでおよぼせます。

2. 『かささぎ』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Claude_Monet_-_The_Magpie_-_Google_Art_Project.jpg

1869年 | 油彩、キャンバス、89 × 130 cm | オルセー美術館

モネは戸外で絵を描くことを始めてからまもなく、雪景色も手がけています。

1868年暮れから妻カミュール、息子ジャンと共に滞在したノルマンディー海沿岸のエルタトで制作されたこの作品は、一面に雪に覆われた田舎の冬景色を描いたもので、ルノワールは画商に「なぜ、雪なんかを描くのかね、自然が病気にしてみたいなものなのに」と言ったそうですが、モネはルノワールと違って、白銀の世界にも輝きとかげりのあることをはっきりと見てとって、微妙に描きわけました。

目の前に広がる銀世界、本作品の名称となった向かって画面左側の木戸に止まるかささぎの黒い羽は、白や中間色の多いこの作品の中で存在感を示しています。

かささぎに引き寄せられた鑑賞者の視線は、木戸から庭に導かれます。

背景では静的に描かれていた雪ですが、庭で太陽の光を受けた雪は明るく輝きとけ始めます。シャーベット状の雪質を細かい凹凸をつけて表現し、一方、日陰の冷たくしまった雪は長いストロークの筆致であらわしています。

時とともに刻々と変化し、さまざまな表情を見せる雪を色彩と筆触で描きこなしているのです。

雪の水車ごっとなことりもう止むか（止むか＝やむか）

大野林火(おおの りんか) (1904-1982)

<季語> 雪で三冬

川端康成はノーベル賞受賞講演の冒頭に、道元禅師の「春は花夏ほととぎす秋は月冬雪さえてすずしかりけり」の歌を引きました。

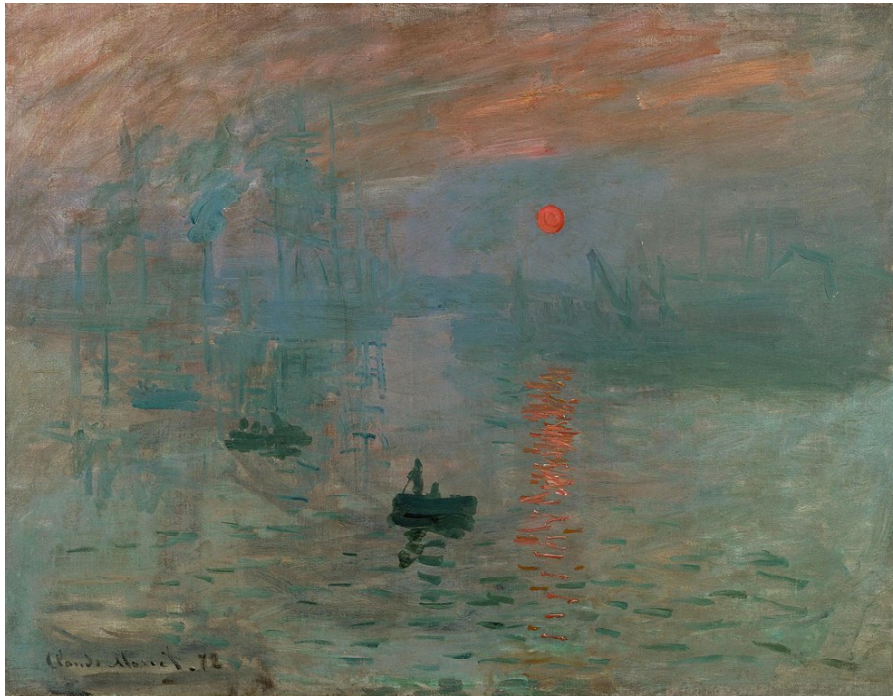
雪は春の花、秋の月と並んで日本の美の代表なのです。

ごっとなことり、ごっとなことり止まりそうで止まらない。

少しずつとける雪が小川に集まり、水車をまわしています。

作者は「本買へば表紙が匂ふ雪の暮」など清新な叙情性豊かな句を多く詠んでいます。

3. 『印象：日の出』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Monet_-_Impression,_Sunrise.jpg

1872年 | 油彩、キャンバス、48 × 63 cm | マルモッタン・モネ美術館

1874年、写真家ナダールのところで開かれた展覧会に出されたこの作品は、モネたち印象主義のグループにとって、結果として記念すべき作品となります。

さだかならざる光の効果を表現しようとする手法はこのグループの典型といえます。

しかし、題名は印象主義の生み出した「傑作」などと気負ったものでなく、偶発的につけられたものでした。

展覧会のカタログの制作を担当していたルノワールの弟エドモンに、展覧会でのモネの作品が多すぎ、しかも題名が『村の入り口』、『村の出口』、『村の朝』・・・など単調すぎるといわれ、この作品の題名をたずねられたモネは「この絵は、ル・アーヴルの実景とは正直いえないものだから、〈印象〉といれたまえ」といったとされています。

こうして『印象：日の出』が命名されたのが実情です。

朝もやの中に眠っている港にのぼる太陽。

小舟が櫓の音をきしませて漕ぎ出ると、波がきらきらとゆれて赤く染まる。

もやの中から透けてくる光を表現する筆触は、光に対して開眼したモネの新しい視覚になったのです。

朝霧や笈を返したる水の音（笈＝ど）

長谷川權(はせがわ かい) (1954)

<季語>霧で三秋

水蒸気が地表や水面の近くで気温が下がって凝結し、小さな水の粒となって一面に立ちこめる現象。気象学では水平視程が1km未満のものをいい、それより見通しのよいものを霧(もや)といいます。俳句の季語では春のものを霞、秋のものを霧とし、霧は単独では季語になっていません。

笈(ど)は魚介類を捕るための仕掛けで、筥(うけ)とも呼ばれます。

筒状や徳利状に竹を編み、その口に返しをつけて、入った魚が出られないようにしています。

朝霧の漂う静けさの中、笈が返され、細い竹が水を切り分けて沈んでいく音だけがします。

4. 『アルジャントウーユのヨット』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Claude_Monet_-_Regattas_at_Argenteuil_-_Google_Art_Project.jpg

1872年頃 | 油彩、キャンバス、48 × 75 cm | オルセー美術館

1871年、モネはセーヌ川のほとりのボート遊びや別荘地として知られたパリの下流の町、アルジャントウーユに移り住みます。

この近くの村にはマネもいて、パリにいたルノワールもよく出かけてきて、同じ主題を描いたりしていました。

そのことなどによりこの地は印象主義のシンボルとなり、もっとも純粋に絵画運動がくりひろげられた「アルジャントウーユ時代」を形成し、新しい視覚がここではぐくまれました。

モネはセーヌ川に憑かれ、ボートを漕ぎ出し、川岸を歩いて風光を描きました。

風をうけて走るヨットを、帆をおろして舳（もや）う舟を、さまざまな光のさざめきのうちに写しとったのです。

この作品は、ヨットの帆の白、空と水の青、草木の緑、小屋のオレンジのほぼ4色の単色だけで構成されていますが、実ののびのびとした大胆な筆致で描かれています。

ヨット来て祭の中に舳ひけり（舳ひ＝もやひ）

黛まどか(まゆずみ まどか) (1962-)

<季語>ヨットで三夏

帆走用の西洋式小型艇。

2枚のセール（帆）を操り、風をつかまえて走らせます。

風をはらんだ帆が海原を滑走する様は爽やかで夏らしい風景です。

本来は大切な交通手段でしたが、今日はレジャーや競技に用いられます。

マリーナに係留されたヨットのリギン（索具）が夕風に吹かれてカランカランと鳴る様も風情があります。

5. 『ひなげし』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Claude_Monet_-_Poppy_Field_-_adjusted.jpg
1873年 | 油彩、キャンバス、50 × 50 cm | オルセー美術館

モネが家族とともにアルジャントゥーユに移り住んだのは、印象主義の仲間が近くに住んでいたことでもあります。若いころの画家がきまってそうであったように、家賃を払いきれずにやむなくパリから越すという理由からでした。

それにもかかわらずモネが描く絵は、愛妻カミーユ、息子のジャンとの生活のしあわせそのままに明るく輝いています。

幼い子と母がセヌ河畔の野原を散策する情景は、色彩に生命を託した画家にふさわしいもので、青空と丸味のある小高い丘の緑の中に咲き乱れるひなげしの赤い斑点が生きています。

日傘をさす女性はカミーユでしょう。

水色のパラソル、赤いひなげし、丘の上の木々が見事な調和を奏でています。

丘の上と下に同じ人物を描いているのは時間の移ろいを表現しているようです。

ここでは「ひなげし」を詠んだ短歌をあげておきます。

ああ皐月（さつき） 仏蘭西（フランス）の野は火の色す
君も雛罌粟（こくりこ） われも雛罌粟（こくりこ）

与謝野晶子（よさの あきこ）（1878-1942）

ひなげしはヨーロッパ中部原産。

日本には江戸時代に渡来し、ケシ科の1年草で、虞美人草、麗春花（れいしゅんか）、英名はポピー、フランスではコクリコ、スペインではアマポーラと呼ばれます。

草丈は50センチくらいで、全体に粗毛があります。

5月ころ細い茎の先に下向きの蕾（つぼみ）をつけます。

4弁花で、色は紅、ピンク、白など。

虞美人草の名は中国の秦の武将、項羽の寵愛を受けた絶世の美女虞氏（虞美人）が死後にこの花に化したといわれたことから、この名があります。

ほっそりとした可憐な花です。

6. 『散歩、日傘をさす女』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Claude_Monet_011.jpg

1875年 | 油彩、キャンバス、100 × 81 cm | ナショナル・ギャラリー(ワシントンD.C.)

7. 『パラソルをさす女 (左向き)』



<https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Monet.012.sonnenschirm.jpg>

1886年 | 油彩、キャンバス、131 × 88.7 cm | 札幌美術館

『散歩、日傘をさす女』はアルジャントウーユの川岸の草むらに立つ日傘をさしたカミーユと息子ジャンの姿を描いています。

風にそよぐネックチーフもスカートも、愛するカミーユの面影をしのばせます。

逆光ぎみの陰影につつまれたこの立ち姿の明るくさわやかな画境は、親しいものたちに囲まれて幸福に満ちた生活から生み出され、日傘の陰影からわかる明快さと繊細さは美しい自然から生み出されたものです。

モネの貧乏時代を支えた最初の妻カミーユは2人目の子供ミッシェルを生んだ後、32歳で天国に召されました。

その後、モネのかつての後援者であったパリの百貨店王エルネスト・オシュデ氏が不景気で経営していた会社が倒産し、妊娠していた妻と5人の子供をモネに託して失踪してしまいます。

その頃の状況からオシュデ夫人が妊娠していたのはモネの子ではないかと推察され、二人は不倫関係にあったようです。

その子を含めてオシュデ夫人の子供は男の子が2人で、4人の娘たちがモネをとりまいて暮らしていて、1886年の『パラソルをさす女』は、そのうちの一人がモデルと考えられています。

以前のカミーユを描いた作品と違い、この作品には子供はいません。

その頃のモネはモデルを雇うお金もなかったようで、オシュデ夫人の子供たちをモデルにした作品が多く描かれています。

ともあれ、1892年オシュデ夫人と再婚するまで、預かった子供たちの成長を見守っていたモネの貧しくも楽しい日々の記録でもあります。

そして、モネとアリス（オシュデ元夫人）と8人の子供たちは終の住処となるジヴェルニーに居を構えます。

この頃から印象派の評価もうなぎのぼりになり、モネも巨匠への道を歩みはじめます。

日傘さす光と影をしたがへて

大高翔(おおたか しょう) (1977-)

<季語> 日傘で三夏

強い日差しをさえぎるための傘。

女性用のものが多いが、最近では男性用のものも。

モネの作品にぴったりの句です。

8. 『菊』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Claude_Monet_051.jpg
1878年 | 油彩、キャンバス、54.5 × 65 cm | オルセー美術館

アルジャントゥーユでは、モネはもっぱらセーヌ川周辺の光景を描くことに集中していました。花を描く場合でも、「静物」ではなく、庭や野に咲いているものでした。しかし、花好きのルノワールの感化もあって、花びんの花を描くようになり、1876年から1880年にかけて、花の静物画を印象派展にしばしば出品しています。この菊の花は咲きほこるようではなくて、いまもしおれそうです。こうした滅びゆくものあわれを心にとめたからなのでしょう。しかし、そうした心情からというよりは、どんな天候をも選ばないで、すべてを描こうとしたモネのことですから、しおれるのも花のうちということなのでしょう。壁紙の赤い花をつけた花束との対照にひかれたのかもしれませんが。あるいは、花よりも強い赤の花びんや敷物との対照によって、晩秋の季節感を描いたのかもしれませんが。

白菊やしづかに時のうつり行（行＝ゆく）

江涯（こうがい）（江戸時代の俳人）

<季語> 白菊で三秋

菊の原産は中国大陸で、日本には奈良時代に薬草として渡来しました。後に観賞用となり、「嵯峨菊」「伊勢菊」といった伝統的な菊が生まれ、江戸時代には「江戸菊」「肥後菊」など数多くの華やかな園芸品種が作られました。花の大きさで大菊、中菊、小菊に分かれ、花の色も白、黄、赤、橙、紫など多彩です。咲き方も一重咲き、八重咲き、丁子咲き、ポンポン咲きなどがあり、花卉の形もさまざまです。花の見頃を迎える秋は、菊花展や名所でにぎわいます。鎌倉時代に後鳥羽上皇が菊の文様を好まれたことから、皇室の御紋になったといわれています。

9. 『舟遊び』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Claude_Monet_-_On_the_Boat_-_Google_Art_Project.jpg
1887年 | 油彩、キャンバス、145.5 × 133.5 cm | 国立西洋美術館（東京）

ジヴェルニーの自宅からほど近い流れで、モネの家族（とはいえ正式に入籍するのは1892年をまたねばなりません）は舟遊びを楽しみました。モネをたよってきたオシュデ夫人の子供たちに訪れた幸福を、この作品が如実に示しています。すこやかに美しく育っていく娘たち。桃色が乙女たちの夢のように軽やかな一コマを描いています。舟の艫（とも）の方だけを四角い画面の中央に、によつきりと漂わせた破調の構図は、光と影の大胆な対照をいっそうあざやかなものにしてしています。

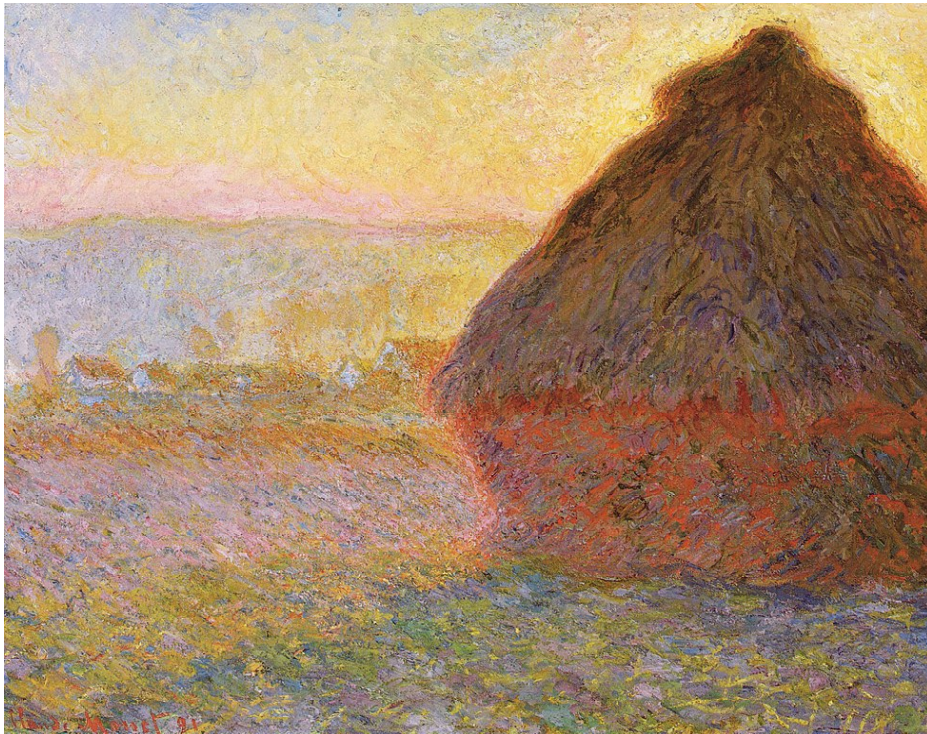
舟遊びあやまちめらす袂かな（袂＝たもと）

高橋淡路女（たかはし あわじじよ）（1890-1955）

<季語> 舟遊びで三夏

納涼のため、海・湖・川などに船を出して楽しむこと。水面を渡る風は涼しいので、夏の暑さを避け、船からの海・湖・河川の景色を楽しみます。「遊船」「遊び船」「遊山船」ともいわれ、松島や琵琶湖、嵐山近辺、隅田川や東京湾など、それぞれに趣があります。船を海に出し、網を投げ、捕れた魚をその場で料理する船遊びも。

10. 『積みわら、日没』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Claude_Monet_-_Graystacks_L.JPG
1891年 | 油彩、キャンバス、73.3 × 92.7 cm | ボストン美術館

モネが見る「積みわら」は常に逆光の位置にありました。それは地形にも起因するのですが、むしろモネが逆光の効果に強くひかれたからでしょう。ジヴェルニーの村の対岸の丘陵は、モネの家からはいつも逆光になっていて、西はかつての要塞都市ヴェルノンから東の村まで、スクリーンのようにおりおりのかげりを見せていました。セーヌの川面から立ちのぼる水蒸気の量にしたがって、そこに差しこむ日の光が屈折し、拡散し、さまざまな色の帯を見せるという具合でした。その自然のたれ幕の前の積みわらのシルエットは夕陽に映え、その輝きに侵蝕され色づき、笠状の部分に斜めの光がかすめてきて、光の反映を複雑にしています。『積みわら』はそうした一日に数分間しか続かない光の効果を描ききった作品といえます。

道の端大藁塚の乗出せる

松本たかし(まつもと たかし) (1906-1956)

<季語>藁塚(わらづか)で晩秋

稲扱(いねこ)きがすんだ新藁を刈り田のあとに円筒形に積みあげたもの。

「にお」「藁にお」などともいわれます。

昔は「稲にお」「稲積み」といって稲の穂をそのまま積みあげました。

ある高さまで積むと、切り株を中心にに向けて並べ雨よけにします。

棒を中心に立てて積む場合と棒を使わない場合があり、地方によって大小、高低ともさまざまです。

積みあげるのは収穫の後になるため、たいていは夕陽を浴びながらの作業になります。

晩秋ののどかな田園風景であり、かつては子どもたちの遊び場でもありました。

1 1. 『睡蓮』



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Claude_Monet_-_Water_Lilies_-_Google_Art_Project_\(462013\).jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Claude_Monet_-_Water_Lilies_-_Google_Art_Project_(462013).jpg)
1916年 | 油彩、キャンバス、200.5 × 201 cm | 国立西洋美術館

1883年4月にジヴェルニーに一軒の家を借りて以後、モネはこの土地にしっかりと根をおろしていききました。

数年後には借家を買って、庭を草花で満ちあふれさせ、池をめぐらせ、睡蓮を池に浮かべさせます。

1899年睡蓮の連作を描きはじめ、1910年代初頭からは『睡蓮』のみの描写、表現に没頭していき、『睡蓮』と名のつく作品は300以上にのぼります。

200.5 × 201cmの『睡蓮』は絵筆の奔放な筆致が鮮明に残っています。

強壮な筆致の淡紅色や紅の花々の暖色と池の深い蒼色が互いに引き立て合い、また、上方の大きな白い花は葉に暗い赤でアクセントをつけています。

この頃のモネは、制作にインスピレーションを与えてくれる美しい庭に囲まれながらも失明の恐怖と闘っていました。

1912年に白内障と診断され、視力が衰えたため、1923年には3回の手術を受けます。

手術後、モネはそれ以前の数年間に描いた多くの作品を破棄しています。

今日に伝わるこの頃の作品は、衰えた視力で描いていたとしても、モネ自身が認めた作品といえます。

晩年、庭園をめぐることによって孤独をまぎらわし、両眼の白内障の手術に耐え、光を取りもどして、老いの身にむち打って大作に取り組んだモネ。

ときに激しいタッチと色彩で描かれた作品は、印象派の画家にとどまることなく前衛でありつづけたことを示しています。

1926年12月5日没。86歳。

睡蓮の少し沈むは睡るらし

安住敦(あづみ あつし) (1907-1988)

<季語>睡蓮で晩夏

熱帯原産の多年生水草で、世界では約40種ほどあります。
睡蓮という名前の由来は、花が蓮に似ていて、夕方閉じて翌朝また開くところから名付けられていますが、実際は日中開いて夕刻に閉じる昼咲きと、夕刻開いて朝閉じる夜咲きのものがあります。
日本に自生する睡蓮は未（ひつじ）の刻（午後2時頃）に咲くことから別名「未草（ひつじくさ）」とも呼ばれ、可憐な白い花をつけることから俳人に好んで詠まれてきました。
現在は明治のはじめに渡来した外国種が紅、白、黄など花色も多く、花も大きく美しいので観賞用に池や沼で栽培されています。

私も詠んでみました。

光る雨受けつひらきぬ未草

白井芳雄

今回は「クロード・モネ、その絵画と俳句」をお届けしました。

全体を通じての参考文献、出典：『現代世界美術全集2 モネ』（集英社）（1970年）
1371-536002-3041

飯田龍太・稲畑汀子・金子兜太・沢木欣一監修
『カラー版 新日本大歳時記 愛蔵版』（講談社）
ISBN978-4-06-128972-7

『角川俳句大歳時記 夏』（角川学芸出版）
ISBN4-04-621032-X C0392

『角川俳句大歳時記 秋』（角川学芸出版）
ISBN978-4-04-621033-3 C0392

『角川俳句大歳時記 冬』（角川学芸出版）
ISBN4-04-621034-6 C0392

白井明大・有賀一広
『日本の七十二候を楽しむー旧暦のある暮らしー』（東邦出版）
ISBN978-4-8094-1011-6 C0076

参考サイト：フリー百科事典ウィキペディア (Wikipedia)

最後までお読みいただきありがとうございました。

(株)技術情報センター メルマガ担当 白井芳雄

本メールマガジンのご感想や本メールマガジンへのご意見・ご要望等 melmaga@tic-co.com まで、
どしどしお寄せ下さい。

株式会社 技術情報センター 〒530-0038 大阪市北区紅梅町2-18 南森町共同ビル 3F
TEL : 06-6358-0141 FAX : 06-6358-0134 E-mail : info@tic-co.com